
キャパシティ・ワールド 能力者達の世界

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャパシティ・ワールド 能力者達の世界

【Zコード】

Z7380Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

「君女顔だから女の子ばかりのチームね」「なんでだよ…」「レベル高い子ばかりのくチームにいたらレベル上がるでしょ」「そんな無茶苦茶な！」そんな先生のむちやぶりに翻弄されて超強い能力者たちのくチームのリーダーにされた僕。ただの無気力少年だったのにツツコミ技術を手に入れて（これは関係ない）ヤンデレ義理妹とか僕を主と慕う無表情系少女とか個性豊かすぎて困るメンバーと日々頑張るお話。僕超頑張ってる。

第1戦 ヤンテレ義理妹、今日も元気に殺し起こし。

1

「ぐげぼ」

朝の目覚めの原因は脇腹にくる鋭い痛みだった。……勿論、腹痛なんかじゃないけど。というより朝の第一声が”ぐげぼ”はどうなのだ自分よ。

あまりの激痛に動けなくなり、数秒、固まる。その間にもう一回、もう一回とテンポ良く（それでも困るけど）脇腹に痛烈な痛みが襲いかかった。

「兄様、おはようございますの時間なのですよ」

鈴のような声が頭上から降りかかってきた。つていうか痛い、本気で痛い。

反応がないことに怒ったのか、もう一度脇腹に衝撃が走る。僕は決死の覚悟で体を起き上がらせた。

「起きてる！起きてるから！」

「なんだ、なら早く目を開けてくれたら良かったのになのです」「てめえのパンチで起き上がれなかつたんだよチクショウ。

あまりの痛みに意識が飛びそうになりながら、しかし今ぶつ飛んだら確実に殺される 比喩じゃないことが恐ろしい のがわかつてるので、必死に意識を保ちつつ、「おはよう」と声をかけた。

「おはようございますなのですよ、兄様」

につっこりと微笑むのは僕の義理妹だった。ふむ、本日も目麗しい。僕の一つ下の義理妹の名前は枷羅葦月。かせなぎいげつつまり必然的に僕の苗字も枷羅ということなのだが、それはどうでもいいことだ。今必要なのはこいつが僕の義理妹という点で、そして現在手にナイフを

……、何？

手に、ナイフ？

2

「うわああ！？」

「兄様、毎日のことなんだから驚かなくていいのですよ」驚くよ
普通は！

でも言われてみれば確かにそつだつた気がする。でも仕込みナイフをしているからといって今それを振り上げたまま腕を固定させている意味はどこにあるのだろうか。

僕はすーはーと深呼吸してから尋ねる。

「つかぬことをお聞きしますが、葦円さん」

「何なのですか？兄様」

「何故にそのナイフを振り上げたまま腕を固定させているのでしょうか？」

きょとん、と可愛らしく首を傾げたあと おかしなことを聞き

ますね的な表情で僕の方へ笑いかける葦円。

「それは勿論、兄様を殺すためなのですよ？」

「恐ろしいよこの義理妹！」

恐怖だった。まさしく恐怖だった。

笑顔で殺人宣言しちゃったよ……しかも義理の兄を！

この子の未来が不安になるなあと思いつつでも絶賛今も不安なのであつた。南無南無。

とりあえずナイフをしまわせて（若干不服な顔をしたのにはスルーした）葦円とともにリビングへと向かつた。おお、いい匂い。

この義理妹、僕をなにかと殺そうとしようとするところさえなければ完璧なのにな……。顔だって悪くない。むしろいいくらいだ。いや、めちゃくちゃいいね。美少女という表現さえたりな「ぶげばつ！？」

また殴られた。

「兄様、なぜ早く食べないのですか？それはあれですか？私の料理が不味くて食べられねーよという反逆行為を表しているのですか？それならば容赦はしませんともええそうです食べ物を粗末にしてはいけないという理論を振りかざして正々堂々殺してさしあげ「ちょ

つと待つた

なんでこいつせいいじまで思考が破綻しているのだ。ていうか今は思考に没頭していただけだ。しかもお前が喜ぶよつなことを。

と思つたものの口に出してはまた殴られるかなと思い（断じてこの義理妹に恐怖を覚えたからではない）、おとなしく朝ごはんを口にした。

数分でご飯を完食する。勿論美味しい。まあ美味しいなくとも完食しなければやはり鉄拳がとんでくるのだろうが。

これが世に言つヤンデレなのだとしたら、こっちから願い下げだつた。せめて、もつ少しだけでいいからおとなしくはならないのだろうか……。いや、ならないだろうな。

「……では、兄様。お食事も終わつたことですし、学校へ行きましょうなのです」

「…………」今日は通学路で何回こつから死の恐怖を味あわせられるんだろう。

でもまあ、こんな日常も悪くなつちやあ悪くない。

僕は学生鞄を持つて、既に玄関へ向かつてしまつた義理妹の後を追いかけた。

「うん、君に来てもらつたのには理由があるんだ

「そりゃ理由がなければ誰も僕なんかを職員室に呼んだりはしませんよ」

僕の反論に、先生も「あれもそれか」となにやらうそと頷いていた。

……うん、なんで納得してるんだろ？

そう、僕は今先生に職員室に呼び出されていた。正確には、担任の木野羣先生なのだが。

先生はパラパラと僕の成績表を見て、それからうしょっとてんまりと笑った。……嫌な予感。

「あたしやね、君にいい提案がある」

「却下します。……じゃなかつた、お断りします」

「まあまあそう硬いこといになさんな」

フツと不敵に笑う先生。

僕は顔をしかめて聞いた。

「どうせろくなことじやないんでしじょう？」

「いいや、君にとって といつか、全男子にとつて羨ましい提案だと思うけどね」

「……どうじうことですか？」

先生はそこで、僕の成績をさらつと言ひのけた。

「君の戦闘成績はこの学校に入学した小学1年生の時からずっと横ばい。最低ランクのF」

「……わかつてるんだからわざわざ口に出さなくともいいでしじょうよ」

「……とか、この職員室にいるのは僕たちだけじゃないんですよ？僕が非難の声をあげても先生はどこ吹く風。それどころか、煙草まですいやがつた。

……煙草、苦手なんだけどな。

「いいこと？君、確かに素行の面では優等生だ。優等生の優等生。どこの学校に行つてもそつだらつな。特に、この変人ばかりの学校なら特にそうだ。だからこそ、この成績は可笑しいんじゃないかい？」

「……可笑しいって、どうじうことですか？」

怪訝に思つて聞いてみた。

先生はすぱーと煙草を口から離し、綺麗な白い輪つかを嗜み程度

に口紅が塗られた唇から生み出す。

僕は気づかれないように それでもさつきよりも強く顔をしかめた。

「あたしゃね、思つたんだ。君には、きつかけが足りない「きつかけ……ですか」

話がつかめずになると、先生は呆れたように目を半眼にした。

「そ。きつかけ。君には少なからず能力があるはずだ。じやなきやこの学校に入れなかつたはずだろう?」

「……それは、そうかもしませんけど。でも、機械の誤算つてこともありえ

「”能力判定機”^{キャパシティ・ジャッジメント}に誤算なんてない」

先生は言い切つた。

……それは、たしかにそうかもしないけど。

「……そこで、だ。あたしゃ、君に「チーム」を組んでもらつ」とにする」

「チーム、つてあの、「チーム」ですか!?」

「そ。あの、「チーム」。当たり前だが、君がリーダーだ。君の「チーム」候補者は、この紙に書いてある」

ペろん。先生は僕に紙を差し出した。

僕はまごついて、それでもそれを受け取つた。

「そこに書いてあるのは、能力が高すぎてハブられた いわば、化け物つてことだね

「化け、物……」

小さく、それを反芻した。

そんな人たちを統率するなんて馬鹿げてる。特に、こんな、

僕には。

「という訳で」

先生はニヤ、と田付きが悪くなつた。

「君女顔だから女の子ばかりのチームね

「なんでだよ!」過去最高に話がつながつていらない展開だなオイ!

「レベル高い子ばかりの△チームにいたらレベル上がるでしょ」

「そんな無茶苦茶な！」

反論しようと先生を睨もうとして

出来なかつた。

先生は笑つていた。

何も、心配はいらないといつよ。」。

僕を、信頼しているかのような、その、目で。

「頑張れ。あたしゃ、応援してるよ。なんたつて君は面白い。いくらだつて可能性がある。だから」

僕は声を出さずに先生の続きを待つた。

先生はそこでいたずらっぽく笑つた。

「ヤンデレ気味の妹ちゃんを任せた！」

「は？」

ハツと思つてリストを見たら　きつちりかつちり義理妹の名前が載つっていた。

「……アイツ……。

「ついでに、妹ちゃんは君が選ぶもなにもないからね。既に君の△チームに所属決定してるから」

「もう一回言うぞ！なんでだよ！」

僕こんなに教師に突つ込んだことねえよ！

「だつて、君の妹ちゃんやばいんだよ？誰ともソリが合わないっていうか……壁ばつか作つてるから、△チーム組みにくいんだよねー」

「うつ……」

思い当たるとこのが有りすきて黙つてしまつた。

先生はそんな僕を見てまた笑う。

「ま、頑張りたまえ、お兄ちゃん

「…………はい」

ま、これも兄貴の勤めなのかもしねいしね。

ここで、僕ら兄妹の通う学校について一通り簡単な説明をしておこうと思つ。

まず学校の名前だが、『戦士育成防衛機関付属学園』 略して、
戦学。

そのままの学校名にそのままの略称名だが、それはまあ僕の知つたことではない。

で、この学校はその名の通りの学校だ。

現在平成26年。資源の激減、食料量の低下から他国との関係がギスギスしてきた日本には、やはり当然というか”武力を再び我が国に”という運動が120年程前に起こつた。この運動を”武力再起運動”と言つ。これにより　かねてから武力の確保を願い続けてきた役人が裏で後押しし　日本には再び武力が確保されることになつた。

これを反対したのが米国や多数の”日本が武力をもたないことにより得をしてきた国”だった。しかし日本は反対を押し切り防衛機関を設立。

そして同時に日本の科学は更なる深みへと発展していった。いや、それが発展というのかは知らない。でも、国はそれを発展だと言い張つた。

”超能力者”　　そういうのが、正しいのか。

超人。それは火や風などの元素操るという原始的なものから、透明の盾や精神的な干渉など様々な物に及んだ。

しかし、国の科学者が発見したのは”能力そのもの”ではない。
”人間の潜在的能力を引き出す薬”　　”能力開花”だ。

これによつて、世界は騒然となつた。『人間は神の力を手に入れた』と騒ぐ宗教信者に『悪魔の力を手にした』と反論する市民、『それは他国にとつて深刻な不可思議な物質となる』と述べた大国の

大統領など世間は様々な意見で反発しあつたが、日本の答えはただ一つのみ。『……これは、武力である。』

つまり日本にとつてこれは『力』であると認めたものだから、これまた世間は騒ぐ騒ぐ。世界大戦が起こらなかつたのが不思議なくらいである、と当時の人々のインタビューや見ると誰しもそう言つていた。もしかしたらそれも日本の”能力者”が何か操作でもしていたのかかもしれない。ともかく、日本への批判は高まつた。その”薬物”の情報を提示せよ、とどの国も言つた。

日本は最初はそれを嫌がつたが、戦争が巻き起こりそうなことと自國だけでは生きていけないことを感じ、一部提示という形で騒ぎは收まつた。

それが、僕達の歴史だ。

そしてその頃、戦学は誕生した。

キヤパシティ・ブロームを使い能力が開花すると判断された者その判断をするのが先ほど話に出てきた”能力判定器”^{キヤパシティ・ジャッジメント}だつたりするのみが入学できる特殊な育成学校。

小学校から高校まで成り立つていて、レベルはFからSまで。最低ランクがFで最高ランクがSSだ。

生徒は戦士、検索者、暗殺者など自身の能力にあつた分類を選び、2人から5人編成で「チーム」を組み、“任務”を遂行する。

これが、戦学だ。

ついでに葦月はレベルSの凄腕戦士だ。鼻が高いのは高いのだがそんな戦士が毎朝脇腹を蹴つてくるのだから僕の痛みは実は尋常のものではない。

それにしても。

……あいつ、やつぱり人と、「チーム」組めてなかつたんだなあ……。

僕は溜息をついて家路についた。途中、クラスメイトとすれ違い挨拶をする。

「あ、やつと家だ……」

僕は扉を開けようとして ふと、その手を止めた。

何か、嫌な予感がする。

「……まさか、な」

例えだが、もしもアイツが既に僕と「チーム」を組むことになつたと知っていたとしたら?

……考えたくない。

と、そこで勢いよく扉が開いて僕は中に引っ張り込まれた。

「うぎやつ」

したたかに額を玄関の段差にぶつける。

犯人はまあ、分かつていた。

「葦月……」

「兄様! 兄様遅いなのです! もづ、もづもづもづ! ……今日はお祝いでーなのですよ! ? さあさあ早く席について! パーティーです! パーティーなのです!」

葦月はぐるぐると（額から血を出している僕には勿論気にせぬで）回転してキッチンへと消えてしまった。

「……まあ、いつか

色々文句をいうのもめんじくさい。そう、僕はめんじくさがりなのである。

靴をきちんと脱いで、僕はいき匂いのするダイニングへと歩いていった。

第1戦 ヤンクトレ義理妹、今日も元気に殺し起じ。 (後書き)

感想頂けたら泣いて喜びますー。これから頑張って書くのでよろしく
お願いします!

第2戦 無表情少女は言葉が拙いようです。

1

葦月はまず静かに壁をいや、向こう側にある的を見つめた。慣れているはものの、いや、慣れているからこそ慎重に、葦月は動いた。

投剣。

各指の間にさしたクナイや短剣が葦月の動きにあわせて壁に向かつて投げ出された。しかしそれは壁にぶつかるなどということは起きない。的と葦月の間にある障害物の壁を樂々通り抜けた。向こうで、ザクザクという的にクナイが刺さる音がする。

葦月はふう、と息をつき、そのまま投げたクナイと同じように壁を通り抜けた。そして数秒待つているとまた壁から戻ってくる。「全部成功しましたのです」

「それは良かつたな」

僕が褒めると葦月は嬉しそうにニッコリと笑った。それはかなり魅力的で、僕のように毎日みて慣れていない人だつたならば、数秒硬直して次の瞬間にはファンクラブの仲間入りだ。

実際に何人もそういう人を見てきたしな。

葦月の能力は先ほど見せたように、”透過視”である。物を物体の間を通り抜けさせ、自身の目も物体の間を通り抜け、向こう側を見ることができる。実際には暗殺者向きの能力なのだが、葦月はこれを使して戦士としての自分を確立していった。恐ろしい義理妹である。しかもそれでSランクの称号と”絶対透過の投剣姫”といいう一つ名までつけられているのだから、尚更感嘆する。

ついでに、今僕は葦月の能力練習の立ち合いをしていた。折角、<チーム>を組めたのだからと葦月に強引に誘われたからである。

そして、驚くべきことに実はここは葦月専用の連取所なのだつた。最上級レベルAランクとSランクには個人の練習場が割り当てられる。相変わらず、すごい妹だ。

当の本人である葦月が満足そうな顔をしているので、今日ばかりは良しとしようか。……なんて思つていると、視界の先にクナイ、

が、「危なッ」

僕はこうこううとうばかり発揮される反射神経を使ってそれを避けた。

「……葦月、何が気に入らないんだ」そして何故クナイを投げるんだ。

葦月はクナイを投げ終えたポーズから寸分動かずこちらを睨みつけていた。

「兄様、これはデートなのですよ？ 密室デートなのです。『デート』『デート』そこまでだ」

誰もお前ど『デート』なんかしてねえよ。確かにこの練習場が（壁で隔ててあるために）若干狭いのは合つてるけど。

む、と葦月が頬を膨らませた。うむ、これもまた格別の可愛さがある。

「デートじゃなくて練習の付き合いだろ？」

「でも男女で一人きりで密室にいるんだから、『デート』に決まってるなのですよっ！」憤慨したようにもう一度葦月はクナイを投げた。僕はさらりとそれをする。

僕は嘆息した。やれやれ、なんでこんな我儘娘に育つたのやら。まあ多分大部分は僕にあると思う。甘やかしすぎたかな……。

「だったら汚い掃除用具箱の中に男女が一人でも『デート』なのか？」

「私と兄様の場合はもちろん『もついい』

第一掃除用具箱を『デート』場所に選ぶなんてどうこう神経だ。僕はそこまで無神経ではない。

葦月はクナイを投げたことにより不満は少し減ったのか 僕の寿命もちょっとだけ減った気がするぜ！ それ以上は何も言わず、

ただこちらへと歩いてきた。

さて、練習も終わったみたいだし、本題にはいろいろ。

「葦月、くチーム>に入るなら誰がいい?」「全員ヤです」

僕の隣にストンと腰を下ろした葦月はぷい、とそっぽを向いた。

……そう言われてもなあ。

僕は溜息を付いて葦月の方に顔を向けた。葦月は顔をそらしたまま、目だけこちらへ向けてくる。

さて、兄貴面をする場面かな。

「いいかい葦月?先生はリストを渡してきた。つまり、これは絶対葦月と二人じゃ駄目ってことなんだ。言つてる意味、わかるね?多分このまま誰も入れなかつたら、僕のくチーム>は解散だ」ピク、と葦月の体が動いた。「葦月は僕のくチーム>ではなくなる。また他人のくチーム>に入らなきゃいけない。それはいや、だよね……?」

葦月は少しの間も開けずくくりと大きく頷いた。よしよし、この調子でいけそうだ。

「だから、誰か出来れば早めに人を入れなければいけない。だから「ヤ。」拒絶された。

何でだよ。

……こいつ、今の話聞いてたのか?

と思つていると、「でも、」と葦月は続きを口にした。

「兄様といられるなら、他人の女が居てもいい」

……他人の女って……。

ま、これでいいか。やつと葦月の賛同が得られたわけだ。

昨日のパーティーの後、いくらいつても聞かなかつたのだから、僕としては上々だ。

「よし、偉いな」

僕が葦月の頭をなでると、葦月は嬉しそうに頭をすり寄せた。犬かこいつは。

しつかし僕も甘やかしすぎだなあ……だからといって厳しくする

つもりは、毛頭ない。

だつて葦月は、僕の大切な妹だから。例えそれが義理だとしても、だ。

「さてと」
じゃ、いつちょ仲間集めとこきますか。

2

とは言つものまず誰にするか決めていない。

僕はハツキリいつて無能 文字通り、無能 だ。なので葦月の能力と相性が良さそうなものがいいだらう。

そろは言つても、葦月の能力そのものには物理的な物がないので、そういうのも心配しなくていい。

だとすれば、何を基準にすればいいんだらうか。……顔？

いやいやいや。……一応言つておくが、どの子も美少女だった。まあうちの義理妹には勝てないけどな！

と僕が心中でシスコンつぶりを發揮する。どちらかといえば親のような感情に近いけど。

ま、葦月にはまず合わない勝気そうな女の子はやめておこう。さすがに。

「……兄様兄様」つんつん、と葦月が僕の袖をつっこた。「兄様はどの子がお好きなのですか？」

「…………えと、どうして？」

数秒躊躇つて聞いた。葦月はふふ、と怪しげな笑いを浮かべて「まずそいつからぶつ殺しにいきますです」と恐ろしいことを語つてのけた。

うん。正直に答えてなくてよかつた。

葦月はさつきからふふふふ、と笑いながらナイフの刃を研いでいた。……さつきの話、覚えているのか？

取り敢えず怖いので葦月は帰させておく。

戦学には授業というものがない。いや、あるにはある。それはただ一つ、”戦闘訓練”のみ。各々が自分にあつたと思^{クラス}う系統に行き ”戦闘訓練”を受け成長するのみだ。

それすらも終わらせてしまった義理妹とそれすら分からず色々放浪して投げ出された僕には特にやることがない。

なので、今帰らせても別になんの問題もないわけだ。僕が「今日は凝つた物が食べたいな」と呟くと葦月はナイフを研ぐ手を止め、一目散に家へと帰ってしまった。今日の晩ご飯はさぞかし手が凝つたものだろう。まだ2時なわけだし。

そういうわけで一人になつた僕は、一応日星を付けておいた女子へ会いに行くことにした。

端塚古織。

葦月の2つ下

つまり、中学1年生か。

AランクとSランクの中間に位置する（しかもその中でも上）有能中の有能の少女。ただ、言語能力に多少の弊害があり、とのことだそうで。

まあ、構わない。あつて話をしてみよ。

やはり有能だからかこの端塚さんにも練習場が割り当てられているみたいなので、今はそこへ向かっている。

そこは葦月の練習場からそうかかるない場所にあつた。

「……ここか」

小さく、『端塚専用』と書かれたプレートがかかっている。ここに間違いない。

そう思つて扉を少し開け の前に、扉を開かれた。

「……」

驚いて声を失う。いや、これは当然か。

扉の前に立つていた人間の気配など、戦士として気づいて当たり前、なのかもしない。

勿論、普通の女の子としては落第点なのかもしれないが。

そつ、端塚古織が目の前にたつていた。無表情の、塊とでも言える顔だったが、それゆえに、美しい。

「……用」端塚さんが口を開いた。

「え？」

単語しか聞き取れなかつたので、僕がそう聞き返すと、端塚さんはもう一度

「用」

と繰り返した。

……成程、これが言語能力の弊害ね。
ま、この程度障害にも弊害にもならない。

「君が端塚古織？」

「……」「こくり、と頷いた。

「じゃあ、僕の「チーム」に入らないか？」

「……」ふるふる、と首を横に振つた。
うん、断られたらしい。

じゃ、帰るか。

「そつか、じゃあ僕は帰るね」

そう言つて来た道を帰ろうとしたとき、「え？」ぎゅ、と袖をつかまれた。

振り向くと、端塚さんの瞳孔が僅かに開いていた。

「あなた、わたしを「じうこんに、ちーむしない？」

ゆつくりと、確かめるように端塚さんは言葉を紡ぐ。
端塚さんは真っ直ぐに僕の瞳を覗き込んだ。

「……やつぱり。僕は心の中で呴く。

「君、ずっと強引にチームに入れさせられてたんだ」「じぐ、と大きく端塚さんは頷いた。

「みんな、わたし、ちーむしたがる。だから、ちーむいれる
つまり、彼女の能力は高すぎた。だからこそ、「チーム」に入ら
ざるを得なかつた。

葦月のように。「チームなんて、馴染めるはずのないもの。」「でも、あなたたちがう。……どうして？」

「どうしてって言われても。「……なんとなく、かな」

何故か納得したのか、端塚さんは「……」と無言で頷いた。

……いつ、手を話してくれるのかなあ。まあ、可愛い子だからいいんだけどさ。

「……なまえ

「名前？」

「そうか。僕はこの子を知っているけど、この子は僕のことを知らないのか。

「枷籠。かせなきかがり
枷籠かがりだ」

「……かがり」

端塚さんは僕の名前を反覆して、それから2階、頷いた。

「……？」

「それだけすると、端塚さんは練習室の中に入ってしまった。

「……なんか、不思議な子、だな……」

僕は呆然と、そう呟いた。

第2戦 無表情少女は言葉が拙いよつです。（後書き）

感想・評価いただけたら嬉しいです！

第3戦 誘拐犯と任務のお達し。

1

放課後。

ついでに放課後まで何をしていたのかというとそれはもう何もしていなかつた。ただ単に図書室で本を読んでいただけだつた。

……いや、家に帰ると義理妹が怖いもので。

恐妻が居る臆病な夫の気分つてこんな感じなのかな、と少し戯言たわいごとを思つた。

そんなことを思つてゐると、端末に電話がかかつてきたり。ここで説明しよう！端末とは携帯機能（からいろいろさらに発展した機能も追加された）肌に直接付ける型の小型機器なのである！「なんのキャラだよ」

僕は自分の思考につつこみながら耳につけた端末のボタンを押し
た。

「はい、枷薙で『君ツ！君君君 ツツ！…』

先生だつた。ていうかうるさい。

音量のボリュームが自動で下がつたらしい、先生の慌てた大声が普通の声程度になつた。ただ、先生の周りの人は迷惑だらうけど。

「何があつたんですか？」

『端ツ端塚ツ！端塚古織がツ！…！』

次の瞬間、僕の耳に届いたのは、ありえない台詞だつた。

『端塚古織が、誘拐されたんだ！』

2

ランクA（しかも細かく表記するならランクA+）の戦士が誘拐されたとなつて、教師軍は騒然となつてゐるらしい。

……僕の義理妹じやないことを祈るばかりだ。

ま、あいつなら殺してグチャグチャにしてポイ捨てるようなタイプだから心配はいらないか。

そんなことを、僕は走りながら思つ。つていうか今はそんなことを考えている暇はない。

『今日は任務として扱うよ。枷薙篝君』

阿呆な思考ことは追い出して、冷静を取り戻した先生に言われたことだけを思い出す。

『異論はあつても聞かない。戦学の掟の一つ、自分の「チーム」所属の仲間がやられたときは、真っ先にそのリーダーが対処すべし。何？まだ「チーム」には入つてないって？候補者なんだから差別しない。というかあたしゃ聞かない』これを聞いて僕は横暴な先生だなとこんな時でも笑つてしまつた。『一応端塚古織が消えた場所は何となく分かつていてるわ。彼女の制服にはGPS機能が搭載されているから。最後に消えた場所は』

空港。

そこへ、僕は向かつてゐる。

『卑劣な手だ。火器を操り莫大な威力を誇る彼女が飛行機に乗せられたら、手も足も出ない。特に高空を飛んでいる時はね。機体に穴を開けて自分も真っ逆さまだ』

そしてだからこそ犯人たちは空港まで彼女を連れていつたのだろう。彼女の特異な能力を封じるために。でも……。

『任務だ。枷薙篝君。』端塚古織を生きたまま奪還せよ。』

生きたまま、ね……。

既に殺されてたら、どうするんだよチクショウ。

『君なら大丈夫だ。だから頑張りなさい』

そこでブツツと回線が切れた。

頑張りなさい、か……。

それって、期待の裏返しの言葉なんだよな……。だからこそ、困るんだけど。

「さてと、ついたか」

学校から空港はそんなに離れていない。自動車や自転車を探してから行くよりもこっちのほうが早いだろうとふんだのもこのためだ。空港には現在、戦学の方から”離陸禁止”という命令が発布されている。

ならば彼女はまだここにいるはずだ。

僕は深呼吸して、もう一度走り出した。

3

「すみません、こんな感じの女の子見かけませんでしたか？」

「さあ、知りませんねえ……『ごめんなさい』」

受付の係の人に、端末に入った先生から送られてきた端塚さんの写真のファイルを提示したが受付の人は首をかしげるばかりだった。ということは、どこかに閉じ込められでもしているのか？

とりあえず僕は走る。闇雲にだけど仕方がない。だつて他に手掛かりはないんだし。

……葦月に頼めば、もつと早く見つかるかもしれない。探索者向けの能力もあるしな、透視は。特に、相手が隠れている場合には。そう思つたけど やめた。あいつを巻き込めば端塚さんの命が逆に危なくなる。

考える、僕。考えるんだ。

そこではた、と気づいた。

相手は大事にしたくないはず。能力者の誘拐のたいていの理由はモルモット研究材料。大事にすれば生きて持つていくことが難しくなる。

だとすれば。

僕は放送室の方へ向かつた。

そしてその中に駆け込む。

「すみません、そのマイクってこの空港全体に聞かせられますか？」

「え？あ、はい、そうですけど……、あら、戦学の方ですね」

「はい！すみません、任務なんです！使わせてもらいます！」

法律で”戦学の生徒の任務にはできうる限り協力せよ”というのが定められているせいか、放送室にいた女人人は快くマイクを貸してくれた。

取り敢えず、深呼吸。

僕はマイクに顔を近づけた。

『えー、てすてす？聞こえてます？はい、ご存知じゃない方もご存知の方も戦学の生徒です。宜しく』

思いつき挑発してみた。うん、ふざけてるようにしか聞こえないな。

案の定またピピッと電話がかかってきてそれが先生で『……君は何をしてい（ブチッ）そこで電話を切つてやった。

『さて、今回の事件ですが、僕の知り合いつまりは戦学の生徒が誘拐されたんです。あ、知つてます？そうですね、便止められましたもんね。という訳で、僕は犯人を捕まえなきやいけません。』
ここで一回スーはー。『なので、今から僕の仲間が来ます。あ、今来てないのはちょっと野暮用で用事があるみたいでね。でも30分したら来ますんで。それまで待つてください。空港は封鎖させていただきます。逃げた場合は犯人決定で。あ、そいつの能力”読心能力”なんで居場所とか全部筒抜けなんで隠れても無駄ですよ。それで心中読んで犯人かどうか調べます』

『ふう、とマイクを外した。

「かなり大胆なことされますね……」

女人人は不安そうに眉を下げた。

……うん、たしかにそうかもしけなかつた。

でもこれで犯人たちは慌てるはず。
僕は滑走路の方に走り出した。……走つてばつかだな、
僕。

第3戦 誘拐犯と任務のお達し。（後書き）

さて、次回に続きます。実は時間がなかつただけです。あと筈、結構大胆つていうか割と考えなし、かも…？

第4戦 比べる自己狂想曲と比べられた嫉妬。

1

その頃。

「……そろそろ帰つてきてもいいのに」

頬を膨らませながら葦月はゴシゴシと短剣の刃を研いだ。鈍く煌めくその刃にはなぜか葦月を安心させるものがあった。多分、ずっとずっと一緒に任務をして、時に自分の命を助けてくれたパートナ一達だから、というものもあるのだろう。いつ何時襲われてもいいよう葦月は毎日刃を研いでいる。シュツシュツと子氣味のよい音だけが部屋に響いた。

彼女は兄と二人暮らしだ。だからこそ、兄がない時間というの寂しい。凄く寂しい。

基本的には兄は気遣つてよく先に帰つていたりするので 葦月がランクSの凄腕戦士で任務が多いというのもあるが 葦月一人と云うのは珍しい。というか、ほとんどない。

特に、こんなに遅くなることは。

「兄様、いつ帰つてくるんだろうね……？」

葦月は短剣に話しかけた。勿論刃は何も言わない。ついでに、傍から見れば物に話しかけている危ない少女なのだが、幸い誰も見ていない。と、葦月だけが思つていた。

実際には、少し遠くで葦月の動向を見張る女たちがいたのだが。「あーあ、折角今日は沢山豪華なもの作ったのに…もう、もうもう、絶対帰つたら刺し殺してやるんだから！」

……一応言つておくが、葦月にとつて、兄に対する”殺す”という言葉は、愛情表現の一種である。愛しすぎて殺してしまった、の

一步手前といつとこりか。

いつも際どい線を言っているので、篝は毎日恐怖しているのだが。「……電話にもでないし。学校も”知らない”の一点張り。ま、そりや兄様を監視してるものなんて居ないだらうけど……」

とか言っている自分は監視されていたりする。

葦月ははーっと溜息をついて短剣をスカートの下につけているベルトにさした。いやつやって葦月は短剣を仕込んであるのである。

よし。葦月は頷いた。

「兄様を探しに行こう」

そして、その瞬間女達が動いた。

2

取り敢えず言つておこづ。増援なんてこない。

それは先生にも言われた。うーん、来たらいいのに。

でも現実はそんなに甘くない。

それに、今回ばかりは、僕だけの方がよさそうな気がする。

「さてと、どこかな

滑走路についた僕はきょろきょろと当たりを見渡した。うむ、広い。ここからどうやってどこから飛ぶかわからない飛行機を見つけるというのだ。

……ま、自分で提案して自分で決行した作戦だから、ちゃんと頑張るけどね。

ついでに、僕の作戦はこうである。

『挑発して脅して飛んだ飛行機が犯人』……考えなしひといつたやつ拳手。

どうせFランクだしね、この程度しか思い浮かばないことが残念でたまらない。……心の底から言つてるよ。多分。

きつと葦月ならさわつと問題を解決してささつと帰ってきて晩ご飯をちやちやつと作つて普通の日常に帰つてしまつのだろつ。

でも、僕は違う。

葦月とは、違うんだ。

君とは、違うんだよ葦月。

だつて僕は、出来損ないなんだ。

「……うわ

……何変なこと考へてゐるんだ僕。しつかりしろ。今は任務中なんだから。

にしても、こんな大雑把な作戦で犯人は動いてくれるのだろうか。

「動いてくれなきゃ困るけどね」

僕がそつとぶやいたとき、ゴオオオオオ、と轟音が近くから聞こえた。

見つけた。

「ふん、なんでこういう時だけ運がいいんだろうね、僕」
2百メートル程先にあつたジャンボジェットがエンジン音を出していた。そして、その中に数人の人影が乗り込む。その一人が、女の子一人入りそうな大きさの鋼鉄の箱を手にしていた。

多分、あの中に端塚さんはいる。
こんな時、何か能力があればいいと思う。例えば葦月なら、ちゃちゃっと敵を倒して端塚さんを連れて帰る。

でも、残念ながら僕にはなんの能力もなく、今持つてゐるのは前葦月から取り上げたまま何となくポケットに入れておいた短剣と、義務のように身に付けている拳銃のみ。

……本当に考えなしだな僕。

でも、こんな装備ならやれることは限られているので、それはそれでいいのかもしぬなかつた。無駄に選択肢が有りすぎていざとなつて選べなくなつたら困るし。

この場合、やることはただひとつ。

「さて、いつちょ乗り込みますか

久々の、人助けのためにね。

3

僕は別に”諜報員^{スパイ}”系の訓練は受けていないので、特に飛行機には詳しくはない。でも、通常の常識レベルなら知らないこともない。ガチャガチャと 鍵開けの技術は戦学で習つた。ついでに、なぜかこれは結構成績が良かつた。 ハッチを開け、中に忍び込む。やつぱり 。 中は貨物室だ。

貨物室には何も入つていなかつた。当然か。僕はピピッと端末を操作して、先生に電話をかけた。

『ん ああ、枷羅君か』

先生はすぐに電話にでた。僕は（流石に壁一枚隔ててるのでないだろうが）声がもれないように小声でいう。

『はい。あの……端塚さんが入つてゐるであろう鋼鉄の箱を発見。ついでに、それが運ばれたジャンボジェットに侵入成功しました』
『お、良かつたじやないか。……つて、ん……？ 鋼鉄の壁くらいなら端塚さんは破れるんじやないんじやないかい？』

『さあ……』いや、なんとなく予想はついてるけど。『特殊な素材か、それかもしくは見間違いかもしれません。でも、僕はさつき放送で”今外に出た奴は犯人”といつたんです。それで今出でいこうとしてるんだから犯人でしょう』

ふうん？ 先生は多分向こうで首を傾げているのだらう。ちょっと声が遠くなつた。

『ま、頑張りなさい』先生の十八番だ。『頑張りなさい』、ね。

『できうる限りそうしますよ』

僕はそう言つて、それから切つた。さて、ここには居ないようだから、客席の方にいかなければならない。

ちょっと歩くと多分客席に続いているだらう扉があつたので手に

かけた。ガチャガチャと鍵開けの技術を使いそれを開く。

そろー、と扉を開く。……まじかよ。

今僕がいたのは客席の通路のど真ん中だった。成程、ここに繋がつているのか。でも、隠れる場所がない。一応椅子の後ろが隠れる場所というならあるにはあるが。

まあ、操縦室とかに出でいくよりはマシか。いやないかもしけないけど。

キヨロキヨロと辺りを見渡して、誰もいないことを確認すると僕は外にでた。

さて、どっちに行けばいいんだろう。右でいいや。

我ながら適當だなあと呆れつつ右へ進む。ぜーんしーん。

「だから何のキャラだよ」

自分の突っ込むのも結構恥ずかしいんだぞ。

僕は自分で決めたとおり右に進む。沢山の客席。普段は密で埋まっているんだろうか。

そんなことを思つていると

「ツ！」

咄嗟に椅子と椅子の間の隙間に体を隠した。 やばい。物凄くやばい。

男一人がこちらへ話しながら歩いてきていた。

「しつかし結構聞いてたよりは簡単だつたよなー、能力者狩り」

「ヒヒつ日本はただの法螺吹きだつたりしてな」

「あれがかなり優秀な奴の一人なんだよ」

これは 英語？

英語か、一番特定しにくい。万国共通語だし、カモフラージュとして使われることも多い。

でもとにかく、今はこちらへ歩いてきている一人の男の対処だ。声はどんどん大きくなっていく ドクドクと心臓の鼓動が早くなる 駄目だ、駄目だ、まさか端塚さんさえ助けていないのに落ち着け、落ち着け。授業で習つただろう？ そして、葦月な

ら、 こういう場合。

…… そうだ。

葦月なら、殺すだろ？

不意打ちだ。僕の覚悟は決まった。仲間を呼ばれる前に、早く。バツと通路に飛び出た。男達の目には驚きが現れる。その、前に。

「ごめん」

グサツ、そして。バンッ。

右には短剣を、左には拳銃を。

体を突き刺す鈍い音と、布に押し当たられてぐぐもつた発砲音。二人の体はあっけなく崩れ落ちる。

「…………」

僕は黙つてそれを見て、体から短剣を抜き出し自分の服で拭つた。二人、殺してしまつた。

短剣の方はともかく、拳銃でやられた方は多分、助からない。

僕は震える体を押し止め、歯を食いしばつて、さらに、続きを歩きだした。

だって、それが任務だ。

端塚さんを救わなければ、ならないのだから。

第4戦 比べる自己否定と比べられる嫉妬。（後書き）

葦月、かなり引き合いで出してますね。それほど薙にはかなりの”人間らしさ”と少しの”異形”を混ぜた、自分の中でも結構特異なキャラだつたり。葦月に対する嫉妬は、”人間らしさ”をかなり顕著に表している部分だと。二人の関係は分かりやすいようで分かりにくいですね。

第5戦 無表情少女の意思と義理妹の愛

1

最初は震えが酷く歩きづらかったものの、少し立つとちょっとだけだがマシになつた。

今は人にあいたくないな……、できうる限り。

僕はさらに進み、人に見つかれないように中を調べていく。
と。

鋼鉄の箱を見つけた。

「…………！」

僕は慌ててそれに近寄る。あまりに吃驚して周囲を警戒するのを忘れていたのを思い出し、キヨロキヨロとあたりを見渡した。誰もいない。

こんこん、と面を叩いてみた。

「あの……端塚さん、いる？ 篤……枷薙篝だけど」

ランクAの戦士ならきっと鋼鉄の壁でも気がつくはずだ。何といつても僕は練習場に行つたとき彼女は僕に気がついて、僕を出迎えたわけだし。

そして、僕の予想はあたつていた。向こうからも、こんこんと返される。

『わ……はじ……おり、な……い』

ほとんど聞き取れなかつたが多分内容は”私は端塚古織。なかにいる”だと思う。言葉は聞き取りにくかつたものの声自体は結構聞こえていたので断言できる。大丈夫、余程声帯模写がうまい人でなければこの子は端塚さんだ。

僕はホッとして それから、「出られる？」と聞いた。

数秒の沈黙。端塚さんは、一体何を考えているのだろうか。

そして、『……むり』と返ってきた。

……はあ。

鋼鉄の箱には、よく見ると鍵が上方に付いていた。……かなり複雑な鍵だ。多分、僕の鍵開け技術では開けられないだろう。よし、じゃあ鍵を探せばいいわけだ。ま、言つほど簡単ではないけれど。

「どこに鍵があるか分かる？」

『…………、あ……つら、そ……じゅう……つに……ける……つた』

“あいつら、操縦室にかけると言つていた”。てことは、僕は操縦室にいかなきやいけないってことだ。

「わかった、ちゃんと助けるから。もし出られたなら行って『…………つた』分かつた、らしい。

僕は座席のポケットまで行つて、そこに入つてゐる何冊かの雑誌を取り出した。あ、あつた。

飛行機の見取り図。

僕がいるのは結構前側 つまり、操縦室に結構近いらしい。

これは好都合だ。さつさと終わらせてさつさと帰ろ。

まずは鍵だ。鍵さえ奪つて端塚さんを救えば 後は手に取るようにならう。

彼女はランクAの戦士。僕よりずっと力がある。

僕は忍び足で操縦室へと向かつた。しかし驚くほど人が少ない。僕が見たとき飛行機に乗り込んでいるのは4人だった。その時既にエンジンがかかつっていたから操縦室には最低一人、もしかしたら二人はいるかもしない。

二人はもう倒した。最低でもあと残つてゐるのは3人。もしくは4人。ま、もしあの4人以外が乗つてきていたら別だけど。

拳銃には一応まだ弾が残つてゐるし、短剣だつて葦月仕様のかなりのものだ。……多分、いける、と思うんだけど。

溜息。あーめんどくさい。

その時、「おい、お前何してゐる!」ゲッ……。

男が僕に掴みかからうと走ってきた。僕は3つの提案を自身にだす。一つ、逃げる。二つ、戦う、三つ、無視する。

逃げるってどこに。無視するってどうやって。

という訳で僕は一つ目の選択肢戦うを選択した。でも選択したからといって何が変わるというわけでもなかつた。ゲームじゃないし。操縦室はもう目に見えてきている。ここで発泡音を出すのはやばい。

そう思つて僕は短剣を取り出した。

男は多分考えなしで動いている。そこで気づいた。こいつ、飛行機に乗り込んでいたときに見た。たしか、端塚さんの入っている箱を持つていた奴だ。

男が両手を振り上げて僕に殴ろうとする。 馬鹿だな、腹が無防備過ぎ。

「ぐおおおあつ！……」

僕が短剣を突き刺すと男は悶絶して転がつた。そのとき、何かが落ちた。僕はすかさず首に手刀を叩きつける。男は意識を失つた。はあはあと息が荒くなつたが、どうやら一人倒せたらしい。と、あれ？

「何だこれ……」

男が転がつたときに落ちたものを拾い上げた。 これは、鍵？……もしかしたらここつは操縦室に鍵を届けに行つっていたのかもしない。好都合だ。

僕はできるだけ早足で端塚さんの入っている箱までたどり着いた。周りには誰もいない。

可笑しい、と思つ。やっぱり、僕の疑惑はあたつていたのだろう。そう思いながら端塚さんに「ただいま」と声をかけた。

「鍵、見つかつたよ」

『…………』

僕がガチャガチャと鍵を開ける音だけが無性に響いた。

そして、数票後。

「……そと

端塚さんは箱から出てきた。そして、僕にむかってぺこりと頭を下げる。

「……あり、がと……」

「いや、いいんだけどね、任務だし。それより、聞きたいことが

」

その時、ガクリ、と機体が揺れた。

……まづい。

ゆつくりとだが 動いている。

滑走路を動くつもりか。

このままだと、飛んで、しまつ。

2

葦月は女達に腕と足を拘束されていた。

「……あなたたちは」

葦月の問いに、女達の一人が答えた。

「私達は名も無き奴隸でございます。戦士育成防衛機関付属学園所屬の”番犬”」

「」う言えれば、お分かりいただけるでしょ？

その名を聞き、葦月は忌忌しげに顔をしかめた。

「で、汚い下水育ちが何の用件なのですか？」

「……お言葉を、慎んでくださいますよう。私達は貴方様が”枷雜葦月の任務の邪魔をするときは止めよ”という命令を下されましたので、それを実行しにきただけでございます」

「兄様は、そんなに”危険”で”重要”な任務を？」

ギリ、と歯を食いしばる。

葦月の問いに、いいえ、と番犬は答えた。

「今日はただの”能力検査”なのだそうです。……私達に答えられるのはここまででござります。どうか、大人しくしておいていただ

ければ」「

「そう、ならもう用はないのですよ」

その瞬間、葦月は女達の後ろにいた。

なつと動搖が走る。

「あなたは人間と自身の体は通過できないはずでは…」「何を言っているの?」

葦月は笑う。

それは、強者の微笑み。

それに、女達は怯んだ。

「”敵”に、自身の能力を全てばらすわけないでしょ?」「

3

「参った……早く逃げよう」

「にげる……ここから、でる?」

「そういうことだ」

また大きくガクンと揺れた。うわまじでやばい気がするが。僕は端塚さんの手を掴んで一番近くの扉まで走った。飛行機はどんどん加速している。早くしないと。

扉の鍵をガチャガチャと開ける。端塚さんを何を思っているのだろうか、無言で僕の方を見ている。

そして、一際ガチャ　といつ音がして、扉が開いた。よし。

「行こう」

「……いく、どこに」

「勿論、学園にまずは行かないとな。先生達に報告しないと

「ほう、……いく

飛行機はまだそれでも速度は遅い。今なら大丈夫。飛び降りれる。

僕が手を差し出しても端塚さんはそれをとののを躊躇つてゐるようだ。

……やつぱり、そりゃ。

「ねえ、端塚さん」「うん、古織ちゃん」

「……わたしは、」

「そりだ、君は古織ちゃんだ。……の人たちに捕まつたのは、わざとだよね？」

古織ちゃんはしばし迷つて、それから小さく頷いた。

そう、ずっと僕が思つていたこと。

僕程度が倒せる相手が、古織ちゃんを誘拐なんて出来る訳がない。そしてそれが誘拐されたということは、わざとしか、考えられない。

「何が嫌だつたんだ？あの学園から抜け出して、研究材料でもいいから自由にいや、厳密には自由じゃないけど、になりたかった理由は」

僕の問いに、古織ちゃんは「……」「深く考へたよつな田付きになつて、それから言つた。

「わたし、りょく、される。いやだ。わたし、もう、あきれた。わたしは」

そう、わたしは

「わたしは、どうぐなんかじや、ない」

それがランクAの、僕なんかじや手の届かないことじつにこる、それでもちつぽけな少女のちつぽけな理由だつた。

これは我儘か、反抗か、なんなかは多分本人にすら分かつてしないだろう。

ただ、嫌だつただけなのだ。きっと。

道具になることを、強要されるのが。

利用されるのが。

「……そつか。そう、だよね……」

「それでも、あなたは、ここから、にげる、いつの？」

古織ちゃんは僕に尋ねた。真剣そのもの、という顔で。

そして僕は、それに答えるように、真剣に頷いた。

「ああ。利用されるのが嫌なら、僕が言つよ。道具にされるのが嫌なら、僕が守るよ。だからねえ、だから。

「自分の意思で、全てを決めて」

そうしてもう一度僕は手を差し伸べた。

その時、「オイ、こっちにあの能力者と知らねえクソガキがいるぞ!」とこう声が聞こえてきた。

時間がない。本當なら、すぐにでも連れ出して飛び降りるべきなのだろう。

でも、僕は嫌だった。

この子に、全てを決めさせようと思った。

そして、古織ちゃんは。

「わたし、あなたと、こいつと一緒に

僕の手をとつて、自ら飛び降りた。

一人して綺麗に着地する。

男達は騒いでいるようだが、飛行機が止まつて僕たちを追う前に

僕は 僕たちは、駆け出した。

自分達の居場所へ帰るために。

「……本当に、良かつたのか?」

僕は走りながら古織ちゃんに言つた。

そして、古織ちゃんの顔を見た。そして、息を呑む。

古織ちゃんは 笑っていた。

「だいじょうぶ。あなた、いる。あなた、わたしをどうぞしない。

あなたを、わたし、しんらいする」

舌足らずな口調で、古織ちゃんは言った。

「わたし、あなたの「チーム」にはいる。あなたを、主^{リーダー}とよぶ」

「うして

「よろしく、主^{リーダー}

上りして、端塚古織は僕たちの「チーム」の一員になった。

4

空港から出てきたら、先生となぜか葦月がいた。
先生は嬉しそうに僕を褒めた。

「よくやつた、君ならできると信じていたよ」

「はあ……有難うござります。あの、あいつらは」
スレイブ

「ああ、番犬があたつている。さっき鎮圧したところだ。君が刺しざり撃つた人間の中に死んだものは居ないそうだ」

「……お気遣いどうも」

やつぱりお見通しだったのか。

よかつた、と安堵して古織ちゃんを先生に引き渡した時だった。
僕の脇腹に、短剣が刺さつた。

「う、ぐあ……っ！」

鋭い痛みに僕はあえなく崩れ落ちた。

……その犯人は、僕に駆け寄つて、それからさうこそ僕のほうへを
ひっぱたいた。

痛いぞ義理妹よ。

「兄様は馬鹿ですか！なんで本当にもう今度から任務のときは私を
呼ぶようにしてください！」

「あー、じめんって」

「全然誠意がこもってないのでです！」

今度は違う脇腹に刺激が、刺さつてる刺さつてる。

……なんで任務では傷一つおつてないのに任務終了後にかなりの大打撃をくらつてるんだよ僕。

「それに変な女と手つないで走つてたし！」

「変な女とは失礼な。今度から、僕らの「チーム」に所属する古織

ちや

「死ねえーーーーー！」 ブスブスブス、と僕の脇腹にだから刺さつてる
刺さつてる。

そういうや僕も敵への攻撃に脇腹をさしてたな……。さすが兄弟、
似るのか。

こんな所で似ても全然嬉しくないけどな。

取り敢えず葦月からはなれよ「おつ？」押し倒された。
僕は地面に仰向けに倒れ、葦月は僕の上に馬乗りになる。
そして、短剣を振り上げながら言つた。

それは、いつも感情が昂つたときに葦月が言つ、癖みたいなセリ
フだ。

「殺したいほど愛してる」

だから僕も言つた。

「知ってる」

そしてとどめどばかりに鎖骨の横あたりにグサリと刺された。
あまりの痛みに悲鳴をあげそうになるのを堪えながら先生にいつ
た。

「あの、先生」

「なんだい？とりあえず教師の前でイチャイチャするのはどうかと
思うよ」

「そうではなくてですね　あの、救急車呼んでください」このま
まだと僕死にますって。「冗談抜きで。

先生は笑つて答えた。

「もう呼んでる」

「うして、僕の初の単独任務は、（義理妹のせいで）いらぬ血を流
しつつ）無事に終わったのだった。

ついでに、あの後出血多量でぶつ倒れてようやく来た救急車に運ばれたのは別の話である。

第5戦 無表情少女の意思と義理妹の愛（後書き）

いいところは義理妹が全てをかつわらひしていく。
さすがメインヒロイン、お見事です。

第6戦 夏、新しい生活

1

さて、古織ちゃん救出任務から3週間後。義理妹に刺された傷も快復し病院から退院した頃には、もう7月になっていた。

義理妹にいつものように刺されそうにながらも起き、『J飯を食べ一緒に学校へ行く。

前と変わらないように見えて 実は、変わった。

まず学校に登校していく場所が”図書館”でもなければ”屋上”でもない、どの「チーム」にも平等に与えられる「チーム」専用の部屋、通称「ロビー」に行くようになったのだ。ロビーにはちょっとした家具 台所とか、洗濯機とか が設備されている。

部室よりはちょっと待遇がいいのかもしかつた。この方部室なんてものに入ったことはないしこの学校に部活なんてないけれど。

キャンパスの扉を開けると、そこには何時間も前からいたよつとすつかり馴染んだような雰囲気の古織ちゃんが居た。

「おはよ、『じぞーます主^{リーダー}、それから義理妹様』

その姿に葦月は目をそらしつつも、小ねく「おはよー!『じぞーます』。うん、僕の教育は結構根付いているらしかった。

「おはよー!」

僕が言つと古織ちゃんは少しだけ顔を綻ばせた。葦月には叶わないが中々可愛い。

……僕も結構なシステムだなあ……別にいいけど。

「チーム」の活動なんてのは、結構アバウトである。任務があれば任務を成功するための人選と策を練り、任務に向かう。後は個々

の練習をしたり 例えばお互に戦いあつたり するくらいだ。

戦学は良い言い方をすれば自由、悪く言えば放任主義である。あとやることが極端だ。

小学校6年間は”常識”と”戦闘の基礎”を一気に高校レベルまで詰め込まれるため、土曜日7時間授業制をとり、道徳（まあこれ教えてしまつたら人殺しなんてできないしな）や音楽の授業は一切ない。体育の時間は体力や気配の消し方、普通の授業でも能力の使い方など普通じゃないことを留つ。

その小学校が終わればあとは”戦闘訓練”のみだ。本当、やることなすこと極端すぎる。

「そういえば兄様」

葦月は紅茶をすすりながら僕に話しかけた。

「今日は、朝の集会があつた気がしますなのです」

「ああ……あれって強制だつけ」

「確かにいい知らせをする、といつ話でしたが……」

「いい話、ねえ。

大方、どつかの大きい研究所を潰してきたとかそんなんだろうけど。

「ま、やることないし一応行つておくか」

「はいなのです」

「了解です、主^{リーダー}」

ついでに、古織ちゃんはこの3週間で”了解”といつ単語を覚えたらしい。それが得意になつたのかかなり乱用する。なんか嫌なんだけどなあ、従わせてるみたいで。

あとは”義理妹様”とか”命令”とか。

変な単語ばっかり覚えるな、この子。

そんなことを思つていたら、義理妹が、早く行きましょう、と僕を急かした。

集会所には結構な人数が集まっていた。

それに葦月は舌打ちする。人混みは嫌いなんだっけ、と思いついた。だからと言つてそういう行為は僕の教育に違反するので軽く頭を叩いておいたが。

適当な場所に座り、集会の始まりを待つ。

「兄様、今日はどうやら任務終了で誰かが帰つてくるらしいですよ
「へえ、そうなのか。どうりで人が多いはずだ」

ついでに席は葦月、僕、古織ちゃんの順だ。葦月は短剣を研ぎつづ僕に話しかけ、古織ちゃんはぼーと宙を眺めている。

数分後、知らない先生が出てきた。マイクを持ち、ハキハキとしてやべる。

『えー本日は、なんと柊木ノ葉さん』その瞬間よこでギリ、という歯軋りの音が聞こえた。『が2年ぶりに任務を達成して帰つてきます。皆さん彼女に出会つたら盛大に拍手をしてあげてください。彼女の任務達成は我々にとってかなり有益にことを運ぶことになりそうです』

「おおおおお、と歓声がなった。

この学校、長期任務が終わつた人をやたらと褒め称える一種の儀式じゃないかと疑うような期間があるんだよな。勿論、僕は遠巻きにすらしないでスタスタ後をさるタイプだけど。

でもまあ、ともかく。

「嫌いなの? そいつ」

僕は未だに歯ぎしりをしている意月に聞いた

葦月は簡潔に答える。

「SSランク」

「……あー」

どうやら自分よりも強いから毛嫌つてただけだった。完璧こいつの方が一方的に嫌悪を抱いている。

そろそろ、自分が世界を回してゐるなんて思わないで欲しい。

……いや。

それは、あるいは”葦月”の中では正しいのか。

だつて、葦月の世界には自分と”もう一人”しかいない。

その”もう一人”は確かに、葦月が全てを決めているから。

……だから、そういうことはいちいち思い返さなくていいんだつてば、僕。

もしかして古織ちゃんも嫌つてゐるのかな?と思いつつ座つている

古織ちゃんに聞くと、

「ううん。べつに、どうでもいい

と返ってきた。まあ、他人にいろんな意味で無関心そうだからなー。

どうやら朝拜はそれだけだつたらしく(いや細かい)と色々言われたが)人数も少しずつ減つてきていた。めんどくせくなつたので、僕たち帰ることにした。

「兄様、どうでもよい情報なのでしたね。普通に端末に送つてくれればいいものを」

「まあ、そうだね。でも口口一ーに開じこもつてもよくなないしわ

「さんぽ」

「……それは違うと思うんだけど」

古織ちゃん、意外と天然なかもしかつた。

口口一ーにつづと、そういうえば図書館に本を返していくことを思つ出した。

その皿を一人に譲つと、

「兄様、私が行つてしまふかなのですよ」

「リータ」
「主、命令を」

……うん、自分で行つ。普通に。

つこでこ、このことが後ほど影響するのかは、僕は現時点で何も知らなかつた。

図書館は人が少ない割に結構設備が充実している。

天井がガラス張りで光がいっぱい入ってくるし、階段を登れば小さな庭みたいなのがあるといふらしい。僕は行つたことないけれど。図書の先生に本を返すと、「毎度、ありあとさんした!」と返ってきた。……商売じやないんだから。

どうせコロニーに戻つても暇なだけだ。なら、本を借りていったほうが賢明か。

そこまで考えて、ならどうせならその庭とやらに行つてみようと思つた。ちょっとした好奇心だ。本当はめんどくさいけど。

あのコロニー古織ちゃんはマイペース過ぎるし葦円は殺氣バリ漏れだし居づらいんだよな……実は。

まあ、前よりはずつといいけれど。

居場所が無くて、どこにも隠れるところもない時よりは、ずつと。階段を数分登ると、まず花の甘い香りに花をくすぐられた。本当にあつたんだ。

もう少しだけ登ると、庭の全貌が見えた。噴水や草花で地面が埋もれている。歩くすきまもない。

……あれ?

「足跡?」

草花の上に踏みつけられた、足跡がくつきりと一人分残つていた。よし、これに続いてみるか。

踏みつけられた草花いがいは踏まないよつて、慎重に、身長に歩いていく。

ここ、まるで聖地だ。

なんて、綺麗なんだろ。

名前もしらない花が壁にも埋められていて、どこをみても植物、

植物、植物。

その時だった。

「ぐあー!?

僕が新たな一步を踏み出した瞬間だった。
なんか悲鳴が聞こえた。

……え?

なんとなくその足を何回か力を入れるとそのたびに「うぐつ!?
「ぎえつ!」「ぎゃー!?」などと悲鳴つていうか奇声みたいなも

のがあがる。

まさか。

僕は踏んでいた足を下ろし、その部分だけ草花をかきよける。と
いうか、元々抜かれていたのかどりのぞくといったほうが正しいか。
そして、そこから見えたのは。

「……おは、よう?」

僕はとぎれとぎれになりつつもさう言つた。

その”子”は僕を見て、反射的に言い返す。

「おはよう」

そう、草花のしたには、なぜだが人間の とても可愛らしい女の子
が埋まっていた。

第6戦 夏、新しい生活。（後書き）

新キャラ登場です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7380y/>

キャパシティ・ワールド 能力者達の世界

2011年11月30日22時47分発行